



常磐会短期大学 教授 しめだ 上林 しんいちろう 真一郎 さん
社会福祉法人檸檬会 かみばやし 上林 なつこ 那津子 さん



人権保育専門講座8では、今年度も専門性を高める研修として、全3回の連続講座を開催しました。第2回は10月25日に社会福祉法人檸檬会の上林那津子さんをゲストにお招きし、多文化共生の園づくりについてお話をいただきました。

国内において外国にルーツがある未就学児の割合は年々増えています。そうした中、幼稚園・保育園・こども園では、どの家庭も安心して利用できる対応が求められています。檸檬会の運営する保育施設にも、レイモンド川崎保育園やレイモンド西淀保育園など外国にルーツがある子どもが多数通う実態があります。多いところでは園児の約35%が外国にルーツがあり、中国・フィリピン・インド・ネパールなどエリアもさまざまです。国籍や性別、障害の有無などに関係なく、“子ども一人ひとりに寄り添う丁寧な保育”を掲げる檸檬会では、日本語や日本文化に不慣れな子どもや保護者が感じている「困りごと」をサポートするために、法人全体の取組として「れもんグローバルアクションプロジェクト」を立ち上げました。プロジェクトを通して、「日本語を母語としない親子が利用しやすい園づくりガイドライン」を作成し、日々の保育実践につなげています。

☆彡 講座後の質疑応答 ☆彡

翻訳にかかわっての議論から

- 私たちは、外国にルーツがある家庭に対して、難しい内容・言葉だからどうせ分からないだろうとか、やさしい日本語にしなければならぬと考えて（バイアスをかける）しまっていることがある。正確に伝えないといけない発達のことなど、難しい言葉を、やさしい日本語にするよりも、そのまま難しい言葉（正式な日本語）で伝えた方が、翻訳アプリで正しく翻訳できるので伝わる場合がある。難しい言葉であっても、そのまま伝えた方が伝わることが多い。
- ルビをふるとルビの部分も翻訳してしまうことになり、上手く翻訳できずに何が書かれているかが分からなくなってしまうことがある。私たちが良かれと思って、「ルビをふること」が実はかえって、翻訳の邪魔になってしまう。
- 市で支給されている翻訳機を使うよりも、保育者から身振り手振りで伝えた方が伝わる場合がある。翻訳機は必要な場合もあるが、思っているほど使わない。保護者が日々使っている翻訳アプリを使うこともある。言葉の問題は状況によって正解は1つではない。



《参加者の声》

- 外国にルーツのある子どもが多い園なので、今回の講座の内容は身近な問題とリンクする部分も多く学びになりました。外国にルーツのある子どもたち、保護者は園の中で言うところの少数派です。いろんな場面において、子どもたちがどんな気持ちでいるのか、自分は伝えていたつもりになっていなかったか、今一度立ち止まり、見つめ直すことができました。
- 自園にも外国にルーツのある子が登園していますが、保護者と話す際に、難しい内容だと分からないと勝手に決めつけて話してしまっていたり、父と母どちらかが日本語の理解ができると、理解できる方に話してしまいがちであったりしていたと感じます。私たちが保護者に対しても、無意識に日本語が通じにくいからと関わることを遠ざけていなかったか、もしそうだとすれば子どもたちが多様性を尊重する態度は育むことはできないと改めて気づきました。自分の保育をふり返ることができてよかったです。